

Title	私の本棚
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2023
Jtitle	新版 窮理図解 No.37 (2023. 8) ,p.7- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應理工の人工タンパク質：タンパク質の自己組織化を利用したものづくり研究 生命情報学科 川上了史 (専任講師)
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000037-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の My favorite books 本棚



●『今日の芸術』

(岡本太郎 著 光文社)

芸術の世界ではいったいどうやってその評価が定まっているのか、本当にわかる人なんているのか、といった疑問を持った時に手に取りました。かなり序盤に「それぞれの実力で、自由に芸術を判断すればよい」と書かれていて、印象に残った本です。はじめて読んだのは20年前ですが、著者について、当時は爆発してる人くらいの認識でしたが、なるほど正しく爆発してるんだと深く納得した記憶があります。残念ながら私は芸術方面には才能が開花しませんでした。思いついた研究をやりたようにやる、かつぱくをYouTubeにあげる、なども、まあ評価は自分が考えることじゃないな、という気軽さでできるようになったので、本書の私の人生への影響は大きいかもしれません。

●『Molybdenum and Tungsten Enzymes』

(Russ Hilleら編 Royal Society of Chemistry)

一冊くらいは専門書をいれておかないと格好がつかないのでいれました。私は、大学院生の頃から生命と元素に関する研究に携わっていたことから、自分でも何かそういうテーマを立ち上げたいと思って進化と元素の研究を始めました。この本は、生命のモリブデンの利用方法や、普通の生命がほとんど使うことがないタングステンについて、どのように使うか徹底的にまとめられた本です。呼吸についての前提知識がある程度必要だと思いますが、嫌気呼吸の電子移動について曖昧だった理解をかなり深めることができました。特に電子伝達の経路を形成する補酵素群がどれだけ精巧に並べられ、組み立てられているのかという観点で、感動的なレベルの生命の美しさを感じます。

●『自然が作る不思議なパターン』

(フィリップ・ボール 著 桃井緑美子 訳 日経ナショナルジオグラフィック社)

タンパク質分子の設計に向けてヒントを探していたときに、いろいろなデザインの本を見ましたが、デザインの本にはなかなか興味をひかれるものがありませんでした。こういう場合は「自然に学ぶべき」という考えで本を探している時に本書に出会いました。本書では自然界をさまざまなスケールで切り取り、そこに生じる多様なパターンを紹介しています。とても綺麗な形やパターンを見て、思わず購入してしまいました。明確に本書から研究成果が出たということではないのですが、個人的にはこの形が作れたらいいなあなどと想像するのが楽しい本ですね。短いながら解説もあったりして、今でも疲れたときなどにふとこの本を開くと気分転換になります。

●『王様のレストラン』

(三谷幸喜 脚本 フジテレビ映像企画部)

「たとえ一流と呼ばれている店でも、あなた(オーナー)に人を思う心の優しさが無い限り、このレストランは三流以下だ」。この一言が、強く印象に残っています。そのシーンの直前に一流とは何かというやりとりがあり、基準が画一的なものではないことを議論しています。その流れから、人間の評価を画一的に行うことが、傲慢であることなどを深く考えさせられました。リーダーとしての振る舞い方を学ぶ点もあれば、些細に思われる問題でもある人にとってはとても重要な問題かもしれない、といった他人の背景に気を配れることの大切さのようなものまで見えてきて、何度見ても心が動いてしまいます。

●『富国と強兵』(中野剛志 著 東洋経済新報社)

タイトルだけ見ると、強烈な思想を思わせるかもしれませんが、至極真面目な歴史と経済の本というべきでしょうか。いわゆる経済学の本というわけでもなく、国家や税について、あるいは貨幣そのものについてまとめられています。特に興味深いのは、現在の主流派経済学が貨幣はそれそのものに価値があるという商品貨幣論で議論されているのに対して、著者は負債の一種であるという信用貨幣論の立場で議論します。信用貨幣論の立場で見ると、直感的に納得しやすい現在のお金に関する価値観がどうも間違っているのではないかと考えさせられます。今後を生きる若者には、どちらがより現実を説明できるものなのか、ぜひ考えてみてほしいテーマだと思います。